

福島県広野町西の沢溜池の越冬白鳥(2008年2月-3月)

柿澤亮三

〒319-0123 茨城県小美玉市羽鳥2718-28

はじめに

福島県の浜通り地方に位置する広野町西の沢溜池には、毎年白鳥が渡来し、越冬することが知られている。この溜池は、小さな谷を塞ぎ止めたもので、コンクリートの約170mの堤と堤と反対側にある給餌場まで約120mの山の字形の用水池である(写真1)。ここでは、白鳥の越冬期間中、毎日2回ほぼ定刻に給餌がなされている。また見学者がときおり訪れ、パンなどを給餌している。

この渡来地の北方約16kmに楢葉町の大堤渡来地があり、また南方約30kmには、いわき市の夏井川渡来地がある。筆者の当初の予想では、西の沢溜池は二つの個体数の多い渡来地の間に位置するため、日常的に両渡来地から白鳥が出入りするのではないかと考えた。しかし、ここを管理している人に尋ねると、「この白鳥は、日中の出入りはしない」との話であった。このような場所に位置しているにもかかわらず、西の沢溜池では白鳥の出入りが無いということに興味をもった。そこで2008年2月と3月に4回の白鳥の観察を行ったので、その結果を報告する。



写真1. 広野町西の沢溜池白鳥渡来地。堤上部から奥の給餌場、埵側を見る(2008年3月13日撮影)。

観察結果

1. 2008年2月27日、午後4時17分から18時までの観察。

Ryozo KAKIZAWA, Wintering Swans at Nishinosawa reservoir, Hirono Town in Fukushima Prefecture, February and March, 2008.

このときは、オオハクチョウ成鳥2羽とコハクチョウ141羽(うち幼鳥23羽)を記録した。コハクチョウの幼鳥の割合は16.3%であった。コハクチョウの家族の識別をScott(1966), Kakizawa(1980)の方法で行った。コハクチョウの13家族が幼鳥をつれており、1家族当りの平均幼鳥数(brood size)は1.77羽であった。幼鳥1羽をつれたものが5家族、幼鳥2羽が4家族、幼鳥3羽と4羽がそれぞれ1家族であった。

この日は、日没後真暗になるまで観察を行ったが、溜池での白鳥の出入りは全く無かった。白鳥たちは薄暮になると三々五々、給餌場から数十m離れた少し陸地の見える浅瀬に移動して群れを形成し、埒入りした。

2. 2月29日午前5時から8時20分までの観察.

午前5時はまだ真暗で、月あかりで水面がぼんやり見えた。水面はひっそりとしている。白鳥は、給餌場を挟んでそれぞれ50~60m離れた2群を形成し、埒をとっていた。この日の時間ごとの観察記録を以下に記した。

5時35分、薄明となる。

同37分、数羽の白鳥が目覚まし、埒(給餌場の近く)の対岸、堤側の水面に(以後対岸とする)移動を始める。

同45分、対岸へ移動した5羽(うち幼鳥3羽)の家族が飛び立ち、水面を一回りして給餌場近くに着水した。

同48分、埒から起きだして対岸へ移動するもの多い。

同50分、移動した13羽が飛び立ち、給餌場附近に降りる。

同53分、6羽が対岸の堤近くから、給餌場へ向って泳いで移動。

6時07分、東の空が赤く染まる。対岸へ移動するもの多く。00分から10分までの間に6羽が飛び立ち、給餌場近くに着水。

同12分、太陽が海側の山の上から顔をだす。

同15分~30分に、23羽が対岸から飛んで、給餌場近くに着水。

同57分、コハクチョウ成鳥4羽が外部からやってきて、西の沢溜池に降りる。

7時12分、6時57分にやってきた4羽が飛び立ち、いわき市方面に去る。

8時12分、コハクチョウ32羽が西の沢溜池上空にやってきて、うち成鳥3羽が降りる。

同26分~28分に給餌。大きなバケツ1杯の古米。

同30分、観察を終える。

この日の観察で、西の沢溜池でも、越冬期間中、少数ではあるが白鳥の出入りがあることが明らかとなった。

3. 3月1日、午前11時12分から30分までの観察.

この日は、オオハクチョウ成鳥2羽とコハクチョウ143羽(うち幼鳥23羽)を記録した。幼鳥数23羽は、3日前と同数であった。

4. 3月13日、午後1時35分から50分までの観察.

オオハクチョウ5羽(うち幼鳥2羽)の1家族とコハクチョウ87羽(うち幼鳥11羽)を記録し、コハクチョウの幼鳥の割合は12.6%であった。コハクチョウの幼鳥づれの家族は6家族で、1家族あたりの平均幼鳥数は1.83羽であった。幼鳥1羽をつれてものが3家

族，2羽づれが1家族，3羽づれが2家族であった。前回調査より数も減り，オオハクチョウのメンバーが変わったことから，この時期西の沢溜池は，渡去期に入っていたことが分る。残っている家族づれのコハクチョウのメンバーも若干変わっているものと考えられる。

溜池で記録したカモ類は，オナガガモ(50羽)，マガモ(20羽)，ホシハジロ(5羽)である。

まとめ

西の沢溜池における2008年2月27日，2月29日，3月1日，3月13日の4回の観察結果から，ここにはオオハクチョウとコハクチョウが渡来，越冬しており，コハクチョウの数が圧倒的に多いという観察結果を得た。また，越冬期間中，白鳥の出入りはあまり無く，ほとんどの白鳥は，一日中池に留っているものと推測された。その証拠の一つとして，2月27日と3月1日の幼鳥数とその家族構成の内訳が全く同じであったことをあげたい。

白鳥類の越冬生活の典型的な日周行動として，筆者はかねてから朝の埒出(埒から採餌場への飛び立ち)と夕方の埒入りをあげてきた(柿澤 1982)。西の沢溜池で越冬する白鳥は，一日中池に留っており，埒出，埒入りの典型的な日周行動を示さなかった。しかし，2月29日の早朝には大変興味のある行動を観察した。すなわち，白鳥たちは朝目を覚ますと，埒から反対側の対岸に向かって移動を始め，100mほど飛んで給餌場近くに降りるという行動である。あるいは，移動後飛び立たずに対岸から水面を泳いで給餌場に向うものもある。この白鳥に見られた朝の埒からの分散と給餌場への短距離移動という行動は，白鳥たちの本来もつ埒から採餌への飛び立ちの代償行動であろうと考えられる。つまり白鳥は，埒出の飛び立ちの欲求を，ごく短距離の飛翔によって満たしているのである。

西の沢溜池における埒入りは，2月27日の観察ではほんの数m泳いで移動するだけで，埒入りの飛び帰りに相当するような代償行動は観察できなかった。

文献

- Kakizawa, R. 1981. Hierachy in the family group and social behaviour in wintering *Cygnus cygnus cygnus*. Proceeding of the Second International Swan Symposium, Sapporo, Japan. 210-211.
- 柿澤亮三. 1982. 親子のきずなはなぜ強い，越冬地まで続くオオハクチョウの家族関係. アニマ, (117): 35-38.
- Scott, P. 1966. The Bewick's Swans at Slimbridge. Wildfowl Trust Ann. Rep 17:20-26.